

研修報告書No. 27

所 属：県外大学病院研修医

研修先：本山町立国民健康保険嶺北中央病院
高知市土佐山へき地診療所

今回高知県の僻地医療研修を選択した理由は地元が香川県であるという安直な理由であり、高知県といえば吉野川、四万十川、広大な土地と新鮮な海の幸、酒は少々という一升二升瓶。このような印象はあるものの高知県の医療に関しては何の予備知識もなく研修に向かった。高知県は人口当たりの医師数、病床数は全国でも上位に位置しているにも関わらず医療機関の偏在により高知市内から離れた地域では十分な医療が提供されていないという現状。これらの現状は高知県に到着後迎えに来ていただいた高知再生医療の職員の方から教えて頂き、研修を通してこの現状については実際に痛感させられた。研修させていただいた嶺北中央病院は高知市内から車で約1時間、病院の裏には壮大な山々と沈下橋とともに吉野川がみられる非常に環境の良い場所に位置しており病床数は約100床、常勤医は7名、24時間救急受け入れも行っている中核病院であった。中核病院ということもありほとんどの検査は大学病院と遜色なく行うことができ、研修中に救急で小脳出血の患者さんの対応なども経験した。大学病院との違いを感じたのは内科における総合診療の重要性である、内科が細分化されておらず内科全般の対応を要求されるため先生方が上部消化管内視鏡検査を当たり前のように行い、小児の簡単な処置も行っていた。これらの診療はこれから専門分野に進む自分にとっては考えさせられるものがあった。またこの診療圏人口は約13000人、高齢化率45%と過疎化、高齢化が問題となっており前述した高知の医療の現状をまざまざと見せつけられた。入院患者も高齢の方がほとんどであり、特養から体調が悪くなった方や在宅で入退院を繰り返している方がほとんどであった。訪問診療も同行させてもらったが、訪問診療における定期的な診察の重要性が理解できたように思う。

今回の研修において最も考えさせられたのは診療所での研修である。大川村診療所、土佐山診療所でも感じたことだが送迎バスの迎えで診療所にきた方々は診療所近くの郵便局に寄ってから診察を受けたりバスの中で談笑したりと、決して診察を受けにくることだけが目的ではないということである。診察においても患者さんの情報はほとんどカルテに記載されており、1ヶ月の経過を聞きお薬を処方する。都会での研修では病院にくる患者さんたちは病気を治す目的で病院に来る、しかし僻地では生活の中に診療所に診察を受けに来ることが含まれている。この違いは今回の研修をしなければ考えもしなかつただろう。高齢者の医療において疾患を治すということだけでなくその疾患とどのように付き合っていくか、という考えも重要であると勉強になった。もちろんそれだけではなく具合の悪い方

を嶺北中央病院のような病院に搬送するかしないか、といった緊急性の鑑別も必要でありやりがいのある仕事であると感じた。

今回の研修を通して上記のような貴重な体験ができ1ヶ月間非常に有意義な研修でした。院長の佐野先生、指導医の吉村先生をはじめ指導して下さった先生方、コメディカルの方々、特に生活面で親身に対応して下さった事務の方々、土佐山診療所の森尾先生、大変お世話になりありがとうございました。

余談ですが嶺北中央病院から車で10分程度の場所に日本酒「桂月」を製造する土佐酒造があります、日本酒が好きな人は研修される際はぜひ訪れてみてください。（土曜にも関わらず車で連れて行った下さった事務の方、見学させてくれた土佐酒造の方々ありがとうございました。）